園長通信～こころ～ №４３

時間の流れ

2024.6.6

時間の流れが違う。今まで勤務した学校などの場所は、それぞれ時間の流れが違っていた。校種でいうと、中学校が一番、時間の流れが早かった。すなわち忙しい、せわしい、慌ただしい。同じ中学校でも、南会津の小規模の中学校は、多少緩やかだった。校種というよりも、子どもの数、教職員の数によるのだろうか。あるいは、時間割があるがために、せわしくなるのだろうか。

現代は、複雑な時代であり、厳しい社会である。人々は、一種の強迫観念に取りつかれてはいないか。あらゆる面で、もっともっとと急き立てられている。だが、不思議なことに、要求なり欲求なりが満たされることはない。それが、自己肯定感の低さ、自己否定、ときには絶望感を招き、厭世観を生む結果となっているように感じる。

何もかもが極端を目指すような中で、自分の価値観の尺度に確信をもてない現代人が増えてはいないか。物差しの目盛りは、人それぞれであって、違いがあっても不思議ではない。大切なのは、目盛りを同じにすることではなく、違う目盛りがあることをお互いが知ったうえで、行動の歩幅を合わせることである。

パソコンをはじめデジタル化がどんどん進む中で、先生方が楽になっているかというと、そんなことはない。かえって、忙しくなっている。何かに急き立てられているのは確かである。余裕というものがない。これだけ便利になっても、子どもと向き合うための時間が増えていかないのはなぜなのか。抜本的に考える必要がある。

教員人生の大半を時間の流れが急な中で過ごしてきた。これが、体に染みついている。実は、慌ただしいほうが、調子がよかったりする。余裕ができたりすると、調子が狂う。悲しい習性である。

幼稚園にいると、子どもがいる間は、元気な子どもたちの声がずっと聞こえる。担任の先生は、ずっとつきっきりである。その中で、一人一人の子どもを観察し、働きかけをしている。遊んでいるときの子どもたちの反応は、バラバラである。担任が設定した環境の中で、それぞれが違う遊びをしている。

時間の流れが早いかというと、担任の先生にとっては、あっという間であろう。その瞬間、瞬間で判断し、子どもたちに声をかけ、また判断し、次の援助を考える。そこには、一人一人の先生の経験と専門性や人間性に裏打ちされたものがある。

できることなら、幼稚園は、現代社会の時間の流れに逆行するくらいの場でありたい。ゆっくりじっくりと、子どもたちを育てられる環境をつくりたい。子どもたちは成長していき、やがては時間の流れに巻き込まれていく。せめて、幼稚園時代ぐらいは、人間らしい時間を過ごさせたい。子どもたちに必要なものは何か。それは、時間の質の問題である。